The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	〔資料紹介〕三手文庫蔵『古今秘抄』
Author(s)	近本, 謙介
Citation	詞林. 1993, 13, p. 1-46
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67330
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〔資料紹介〕

三手文庫蔵『古今秘抄』

近本　謙介

凡例

一、賀茂別雷神社三手文庫蔵『古今秘抄』を底本として、その右に、カリフォルニア大学バークレー校蔵旧三井文庫本『古今秘伝抄』との異同を記した。

一、三手文庫蔵『古今秘抄』の各項目には、便宜上番号を付した。

一、異同のうち、バークレー校蔵『古今秘伝抄』に存しない本文は中黒（・・）によって示した。

一、用字・仮名遣いの違いは無視し、異同としてあげていない。ただし漢字の訓読等の参考になると考えられる場合には、それを記した場合もある。

一、句読点を私に施した。

一、異体字、旧字等は、多く通行の字体に訂したが、一部底文の字体に拠ったものもある。

一、見せ消のあるものは、その指示にしたがって本文を作成したが、書入・注記の類は無視した。

一、虫損等による判読不能の文字は、一字分を□によって示して空欄とした。

一、三手文庫蔵『古今秘抄』本文に於ける丁数を括弧に入れて記した。

一、冒頭の「もくろく」及び末尾の「三鳥三木の秘事」は、バークレー校蔵『古今秘伝抄』には存しない。これらの部分は、三手文庫蔵『古今秘抄』のみの本文を翻刻している。

一、注を施された『古今集』歌との対応関係は、本文に付した番号と対応させて、解題に一覧を掲げたので、そちらを参照されたい。

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、
翻刻は省略しました

解　題

賀茂別雷神社三手文庫に、『古今秘抄』（類　歌・函　宇）と題される近世の写本一冊が蔵されている。いま簡略な書誌を記すと、次のようになる。

寸法　二二・八糎×一六・二糎
外題　秘抄　上下
丁数　二十三丁　巻頭・巻末に遊紙各一丁

外題は表紙に直書され、内題はなく、目録から始まっている。十七丁裏に「一校畢」とした後、十八丁めを「下巻」として始めることから、外題にも記す如く、元は上下二巻仕立てであったことが知られる。『古今秘抄』の名は、奥書直前に「古今秘抄終」と記されることから、これをもって書名としたが、これも一般的な書名以上の意味は持たないと思われる。

この書物は、夙に国文学研究資料館によって撮影され、容易に目にすることができるが、管見の及ぶ限り、本書についての研究は未だなされていないようである。

本書は、『古今集』から約四十首を抜き出して注を加えた、抜書的な古今注であるが、その中には仮名序の引歌を注したものもあり、さらに『新古今集』・『続古今集』歌、各一首が混入している。序注・歌注といった整然とした枠組みにも収まらず、また正統な古今注の書においては考えられない、他集歌の混入といった現象からしても、本書は古今注のいわゆる末流の書との謗りを免れないであろう。

しかし、その一方で、本書が注を施す態度は、豊富に本説としての故事や物語等を引くものであって、鎌倉期から南北朝期にかけての『毘沙門堂本古今集注』・『古今和歌集序聞書三流抄』・『古今和歌集灌頂口伝』、あるいは尊円・頓阿・了誉などの『序注』の系譜を引く末書としての性格も見逃せないものである。これらの諸説の中には、『塵添壒嚢鈔』・『日本記一神代巻取意文』といった中世の教養を支えていたと思われる書や神道書、さらには『神道集』・説経といった文芸の領域とも接する表現を持つものがみられる。また、古今注と伊勢物語注との接点において生成したと覚しき、『古今集』（巻十七・雑上・九一七）、「すみよしとあまはつぐとも長居すな人忘草おふといふなり」歌に付される住吉の忘草の説のうちの、『古今秘抄』の独自要素が、同時代の文芸である『住吉縁起』（慶応義塾図書館蔵・室町時代物語大成所収）の物語や、いわゆる『古今為家抄』の異本と共通する点などは、殊に興味深い問題であるように思われる。これらについては、拙稿「本説をもって説く古今注ひとつ―三手文庫蔵『古今秘抄』考―」（『待兼山論叢』第二十六号文学篇　一九九二・十二）を参照されたい。これらの他にも、一般的な古今注の本説といった概念からは逸脱するものの、中世の教養や理解の一端ともいえる説を開陳しており、本書を、古今注の末流の書のあり方を探る資料として

と同時に、古今注の形式を借りた中世の一種の教養書として読むことも可能ではないかと思われる。

成立に関しては、対校本文であるカリフォルニア大学バークレー校蔵旧三井文庫本『古今秘伝抄』の奥書との比較から考えてみたい。

◎古今秘抄
古今秘抄終
右條々の外住居御照覽候へ。残々不有爲御疑心。以誓句申候。
すゑの露本の雫となりぬとも
いにしへいまのちきりわするな
天文十年十月十一日
右常州鹿嶋住人田山和泉守以證本写之。折節可用取篭之砌にて候ゆへ覚意写畢。損落之多字不可勝計。後覧之助筆希意なり。

◎古今秘伝抄
以上拾六ヶ條、此外ニハ住吉も上覧ましませ。残不申候。御疑ひの心晴さんため、せひしを以て申候。依て一首、
すゑの露もとの雫と成ぬとも
古しへ今のちきり忘るな
右一冊常州鹿嶋住人田山和泉守法名道吟證本以て写之。折節取込之砌にて覚まてに書写畢。落字あけて不可員。唯後纔之たすけ迄也。
慶長六歳十月廿四日早川弥助写之。
元禄二己年四月中三武城之南麻布屋居住豊嶋貞知写之。其後萩原久時、後三浦命雅所持。寛保四（甲子）年九月源永利峯写之。聊不免許他見也。
延享三（丙寅）年猛春写之

両書に異同はあるものの、全く別個に記されたのでないことは明白である。ここで、『古今秘抄』に「天文十年十月十一日」とあることから、天文十（一五四一）年を、本書の成立の下限と一応考えることができよう。一方『古今秘伝抄』はこの部分を欠いており、『古今秘抄』の記す「天文十年」は、後世の、成立年次を引き上げ、その成立を室町期に擬するための所為ではないかという疑問も生じてくるが、逆に『古今秘抄』が記さない「慶長六歳」（一六〇一年）以下の書写奥書を『古今秘伝抄』が有するから、『古今秘抄』の奥書に信を置かないとしても、中世最末期までには成立していたと考えて誤らないであろう。

内容からも、末尾に「三鳥三木の秘事」として、「御賀玉木」・「妻戸にけつり花の事」・「かわな草の事」・「百千鳥の事」・「呼子鳥の事」・「稲負鳥のさた」をあげることから、古今伝授においてこれらを秘事として記す資料の初見、『古今伝受二条・冷泉両家切紙又箱伝授』の文明十二（一四八〇）年をさかのぼることもまたないと考えられ、本書中の「三鳥三木の説」

は、『古今和歌集姫小松』等に同文的に一致する記述を見出すことができ、周辺の古今注や、古今伝授の切紙の類との影響関係も無視できない。

『古今秘抄』成立前の古今集注釈の動向を窺うに、文明三（一四七一）年に『古今和歌集両度聞書』が成り、以後宗祇流の古今伝授は三条西実隆・実枝へと受け継がれていく。一方で東常縁を介さない二条家の流れ、すなわち堯考流においては、延徳四（一四九二）年、堯恵が『延五記』を著し、その後継者経厚・泰昭によって『泰昭聞書』（永正一四年・一五一七）、『尊鎮聞書』（享禄三年・一五三〇）が残されていく。

『古今秘抄』にも、宗祇以降整備されていったであろう秘事説の影響を考えるべき体裁がみられるのは確かであるが、『古今集』の巻順に必ずしも従うことなく数十項目をあげ、あたかも切紙を張り合わせるかのように、しかも本説を豊富に取り込みながら説く類の古今注は、この室町後期においてもかなり特異なものといえるであろう。室町期の古今集注釈書に関しても、曼殊院蔵の古今伝授資料の刊行など、資料の整備が始められたばかりである。本書の翻刻紹介も、室町期にいかなる方法・態度によって古今注の末流の書が綴られていったかを探る、基礎作業のひとつに他ならない。

ここで、伝本について若干の整理を試みておきたい。『古今秘抄』および対校本文の『古今秘伝抄』いずれにしても、一般的な名称ということができ、『国書総目録』にも多数、同名の書物を見出せるが、そこに載る同名の書物は、現時点で未見のものも一点あるが、三手文庫に蔵される『古今秘抄』とは内容を異にしており、類似の書名を持つ『古今秘伝抄』に関してもすべて別書である。但し、国文学研究資料館『調査研究報告』第五号（昭五九・三）所収「カリフォルニア大学バークレー校旧三井文庫本目録稿」に、「宗　一〇二」の分類番号で載る、延享三（一七四六）年の書写になる『古今秘伝抄』一冊は、記述と配列に異同はあるものの同じ内容をもつものである。現在の調査で判明した伝本はこれのみで、『古今集の世界　伝授と享受』（世界思想社　一九八六）において田村緑氏が作成された「古今和歌集注釈書一覧」には、いずれも記されていない。翻刻本文に付した番号にしたがって、『古今秘伝抄』の記事の配列・構成を示すと、次のようになる。

37～39
1～19
（十六ケ條の大事）
20～36
奥書

すなわち『古今秘伝抄』は、『古今秘抄』が巻頭に記す「もくろく」および末尾の「三鳥三木の秘事」を欠いており、『古今秘抄』が「秘事」を記す直前の三鳥の注釈が、『古今秘伝抄』

では、巻頭に配されている。『古今秘伝抄』は「20、あさなけといふ事」の直前に「十六ケ條の大事」とするものの、歌一首に対する注を一ケ條と数えると、以下奥書に至るまでには、十七首に対する歌注が記されている。『新古今集』および『続古今集』歌の混入は、共にこの中に見られるが、これら二首を後の竄入とみても、十六ケ條にはならない。

両書の先後関係を簡単に断じる訳にはいかないが、バークレー校蔵『古今秘伝抄』の奥書は、『古今秘抄』が記す「天文十年十月十一日」の部分を欠いており、翻刻紹介にあたっては、室町期成立であることを記し、記事的にも多く、後に述べる如く、より欠落の少ない三手文庫本『古今秘抄』を底本とすることにした。

それでは、両本文の校合により認められる本文の問題を記していくことにする。相互の本文に数文字単位の異同がありながらも、両書ともに文意が通じる箇所は措くとして、いま少し長い分量での異同をきたしている部分の性格をみていきたい。

『古今秘伝抄』には、十から二十文字程度の欠落がみられる箇所がいくつか存する。たとえば、「1、さきくさの物かたり」中には、数箇所にわたって、『古今秘伝抄』には存しない記述がみられ、関白の家を檜波で葺く理由について『古今秘抄』が

天下の理非を、檜のすくにすゝめ正しきかことくあつかふ家なれは、物のよこしまに非なることをいとふといふ意趣にて、天下の理非正しく、直におちつく事をおもてとする家なれは、

とする傍線部が欠落している。しかしこの部分はその欠落によって文意が不通になるものではなく、にわかに『古今秘伝抄』の「欠落」とは断じ難い。

「3、紫のゆかりの草といふ事」では、古今注・伊勢物語注双方に頻繁に語られる、「大納言みさこ丸」（『古今秘抄』・『古今秘伝抄』は「みさいまる」とする）説話が語られるが、ここで『古今秘抄』が、

昔、大納言みさいまるといふもの、武蔵二十四郡を知行にして、栄花にさかえたるに、叡慮に背し事有て、かの国をめし放されたり。然に、彼みさいまる、叡慮の御免しを申所に、終に不叶ゆへ、

とする傍線部を『古今秘伝抄』は欠いており、これでは「叡慮の御免しを申」さねばならなくなった経緯がわからず、文意不通となってしまう。どうやら『古今秘伝抄』には書写の際に本文の欠落を生じている箇所があるらしい。

「5、鴫の羽かきをかすかくといふ事」において『古今秘抄』が、

君かこぬよのつもる泪を拂ふは、そのかきりなし。君かこぬよはわれそかすかくとは、涙を拂ふ事なり。

とする傍線部を『古今秘伝抄』は欠くため、ここでもやや文意不通になっているが、このような欠落が起こった原因として、欠落したと思われる部分の冒頭「泪を拂ふ」と欠落直後の「涙

を拂ふ」の一致、つまり書写段階での目移りを想定できないであろうか。先にあげた「大納言みさいまる」説話の明らかな欠落部分もその冒頭と欠落直後の文字「叡慮」が一致しているのである。

もちろん『古今秘伝抄』における文意不通部分の原因の全てをそこに帰結させ得るものではない。同じく「5、鴫の羽かきをかすかくといふ事」の冒頭を『古今秘伝抄』は欠いており、文意不通となっているが、これなどはさらに単純な書写上のミスのように思われる。

同様の例として、「16、せんとうかの事」の末尾、

此はなを梅におとしつくることは、定家の哥に、うちわたすおちかた人はこたへねと匂ひそ名のる袖の梅かえ、と返哥すれは、野辺に先咲とよめるは、野梅なり。

とする『古今秘抄』本文の傍線部を欠いた『古今秘伝抄』本文の事例などもあげられよう。

概して『古今秘伝抄』には本文の欠落と思われる箇所が多く、『古今秘抄』の方がより善本であるといえよう。

「7、うふやいはゐのものかたり」の末尾近くを校合本文の形であげると、次のようになる。

◎右『古今秘傳抄』・左『古今秘抄』

・・・

・・・

◎『古今集』対応一覧

（なお、『古今秘抄』は「秘抄」、『古今秘伝抄』は「秘伝抄」と略記した。）

1、さきくさの物かたり

このとのはむべもとみけりさき草のみつばよつばにとのづくりせり

（仮名序・いはひうた）

2、わかの浦のさた

わかの浦にしほみちくればかたをなみあしべをさしてたづなきわたる

（仮名序・赤人）

3、紫のゆかりの草といふ事

紫のひともとゆゑにむさしのゝ草はみながらあはれとぞ見る

（巻十七・雑歌上　よみ人しらず・八六七）

4、わすれくさのこと

すみよしとあまはつぐともながゐすな人忘草おふといふなり

（巻十七・雑歌上　みぶのただみね・九一七）

5、鴫の羽かきをかすかくといふ事

暁のしぎのはねがきももはがきき君がこぬ夜は我ぞかずかく

（巻十五・恋歌五　よみ人しらず・七六一）

6、むらさきのねすりの衣といふ事

こひしくはしたにをおもへ紫のねずりの衣色にいずなゆめ

（巻十三・恋歌三　よみ人しらず・六五二）

二句　を—も（秘抄・秘伝抄）

結句　いずなゆめ—いつなん（秘伝抄）

7、うふやいはゐのものかたり

玉だれのこがめやいづらこよろぎのいその浪わけおきにいでにけり

（巻十七・雑歌上　としゆきの朝臣・八七四）

三句　こよろぎの—こゆるきの（秘抄・秘伝抄）

結句　に—ナシ（秘伝抄）

8、みよしののあわをかたまのこと

みよしののよしののたきにうかびいづるあわをかたまのきゆと見つらむ

（巻十・物名　とものり・四三一）

三句　び—み（秘伝抄）

結句　きゆと見つらむ—きゆもみゆらん（秘伝抄）

9、妻戸にけつり花といふこと
花の木にあらざらめどもさきにけりふりにしこのみなるときもがな
（巻十・物名　文屋やすひで・四四五）
四句　に―こ（秘抄）

10、百わかふといふ事
花ごとにあかずちらしし風なればいくそばくわがうしとかは思ふ
（巻十・物名　よみ人しらず・四六四）
二句　ちらしし―ちらせし（秘抄・秘伝抄）
結句　は―も（秘伝抄）

11、こゝらなくといふ事
こづたへばおのがはかぜにちる花をたれにおほせてここらなくらむ
（巻二・春歌下　そせい・一〇九）
初句　こづたへば―はるくれは（秘抄・秘伝抄）

12、よたゝなくといふ事
五月雨のそらもとどろに郭公なにをうしとかよただなくらむ
（巻三・夏歌　つらゆき・一六〇）

13、ふるの中道といひならはすこと
いそのかみふるのなか道なかなかに見ずはこひしと思はましやは
（巻十四・恋歌四　つらゆき・六七九）
結句　思はましやは―いもいましやは（秘抄・秘伝抄）

14、まとゐするといふ事
思ふどちまとゐせる夜は唐錦たたまくをしき物にぞありける
（巻十七・雑歌上　よみ人しらず・八六四）

15、道を道にたゝすとよめる事
ささのはにふりつむ雪のうれをおもみ本くだちゆくわがさかりはも
（巻十七・雑歌上　よみ人しらず・八九一）
三句　うれをおもみ―うれをもみ（秘抄）
四句　ゆく―ゆけ（秘伝抄）

16、せんとうかの事
うちわたすをち方人に物まうすわれそのそこにしろくさけるはなにの花ぞも
（巻十九・雑体　よみ人しらず・一〇〇七）

17、よしの川を引て世間を恨と云事
流れては妹背の山のなかにおつるよしのの河のよしや世中
（巻十五・恋歌五　読人しらず・八二八）

18、門出の時の心持の様体
いでてゆかん人をとどめむよしなきにとなりの方にはなもひぬかな
（巻十九・雑体　一本、よみ人しらず・一〇四三）
二句　とどめむ―とゝむる（秘伝抄）

19、善悪につかさることあしき段をよめる
木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしにわが身はなりぬべらなり
（巻十八・雑歌下　よみ人しらず・九五九）

20、あさなけといふ事
あさなけに見べききみとしたのまねば思ひたちぬる草枕なり
（巻八・離別歌　寵・三七六）
二句　見べき―みゆへき（秘伝抄）

21、すかるなくのさた
すがるなく秋のはぎはらあさたちて旅行く人をいつとかまたん
（巻八・離別歌　よみ人しらず・三六六）

22、梅の本すへと云事
わがそのの梅のほつえに鶯のねになきぬべきこひもするかな
（巻十一・恋歌一　読人しらず・四九八）
初句　そのの―そのに（秘抄）

23、つかねをのさた
あはれてふ事だになくはなにをかは恋のみだれのつかねをにせむ
（巻十一・恋歌一　読人しらず・五〇二）

24、岩つゝしのさた
思ひいづるときはの山のいはつつじいはねばこそあれこひしきものを
（巻十一・恋歌一　読人しらず・四九五）

25、こむらさきの事
君こずはねやへもいらじこ紫わがもとゆひにしもはおくとも
（巻十四・恋歌四　よみ人しらず・六九三）

26、ゆたのたゆたといふ事
いで我を人なとがめそおほ舟のゆたのたゆたに物思ふころぞ
（巻十一・恋歌一　読人しらず・五〇八）
結句　ころぞ—こそ（秘伝抄）

27、よるの衣をかへすといふ事
いとせめてこひしき時はむば玉のよるの衣を返してぞきる
（巻十二・恋歌二　小野小町・五五四）

28、夕つけ鳥のさた
こひこひてまれにこよひぞ相坂のゆふつけ鳥はなかずもあらなむ
（巻十三・恋歌三　よみ人しらず・六三四）

29、板井の清水といふ事
わがかどのいたゐのし水さととほみ人しくまねばみくさおひにけり
（巻二十・神あそびのうた　とりもののうた・一〇七九）
結句　おひにけり—ゐにけり（秘抄）

30、おとろのものかたり
おく山のおどろがしたもふみわけてみちある代ぞと人に知らせん
（『新古今集』巻十七・雑歌中　太上天皇・一六三五）
二句　が—の（秘伝抄）
したも—下を（秘抄・秘伝抄）

31、みちのくの花かつみといふ事
みちのくのあさかのぬまの花かつみかつ見る人にこひやわたらむ
（巻十四・恋歌四　よみ人しらず・六七七）
四句　見る—みし（秘抄・秘伝抄）
人に—人を（秘伝抄）

32、すゑの松山のさた
君をおきてあだし心をわがもたばすゑの松山浪もこえなむ
（巻二十・東歌　みちのくうた・一〇九三）
初句　を—ナシ（秘伝抄）
三句　わが—われ（秘抄・秘伝抄）

33、はしめの恋といふこゝろを
さざれいしのなかのおもひのうちつけにもゆとも人にしられぬるかな
（『続古今集』巻十二・恋歌二　式子内親王・一〇五一）
二句　おもひの—おもひを（秘抄）
四句　もゆ—もゆる（秘抄・秘伝抄）

34、つきくさのさた
いで人は事のみぞよき月草のうつし心はいろことにして
（巻十四・恋歌四　よみ人しらず・七一一）

35、もとかしはといふ事
いそのかみふるからをののもとがしは本の心はわすられなくに
（巻十七・雑歌上　よみ人しらず・八八六）

36、うつふしそめといふ事
世をいとひこのもとごとにたちよりてうつぶしぞめのあさのきぬなり
（巻十九・雑体　よみ人しらず・一〇六八）
初句　ひ―ふ（秘抄・秘伝抄）
三句　よりて―よれは（秘抄・秘伝抄）
結句　あさの―あまの（秘抄・秘伝抄）

37、いなをゝせとりのさた
わがかどにいなおほせどりのなくなへにけさ吹く風にかりはきにけり
（巻四・秋歌上　よみ人しらず・二〇八）

38、呼子鳥のさた
をちこちのたつきもしらぬ山なかにおぼつかなくもよぶこどりかな
（巻一・春歌　よみ人しらず・二九）

39、都鳥といふ事
名にしおはばいざ事とはむ宮こどりわが思ふ人はありやなしやと
（巻九・羈旅歌　在原業平朝臣・四一一）

イ、御賀玉木

ロ、妻戸にけつり花の事

ハ、かわな草の事

ニ、百千鳥の事
ももちどりさへづる春は物ごとにあらたまれども我ぞふり行く
（巻一・春歌上　よみ人しらず・二八）

ホ、呼子鳥の事→38参照。

ヘ、稲負鳥のさた→37参照。

末筆ながら、貴重な資料の調査・翻刻を御許可いただいた、賀茂別雷神社三手文庫に篤く御礼申し上げます。

（ちかもと・けんすけ　本学大学院博士後期課程）